

9. 「2ちゃんねる」という現象

現在の日本の電子ネットワーク事情について語るのなら、「2ちゃんねる」のことを無視するわけにはいかないだろう。300以上の電子掲示板の集合体であるこのシステムの利用者は、優に数百万人を超えているといわれる。マスコミなどを通じて一般に知られるようになったのは、おそらく2000年5月の佐賀バスジャック事件の直前に犯人の少年が「ネオむぎ茶」なるハンドルで事件をおわせる書き込みをしていたらしいという出来事が話題になって以来であろうか。その後も生命保険会社の職員バッシングに起因する掲示板削除裁判がおきたりすることで、その存在はインターネットのユーザ以外にも広く知られるようになった。

あるニュースキャスターが「便所の落書き」と吐き捨てたともされるこの掲示板システムの最大の特徴としては、掲示板の表示システムがきわめてよくできているということの他に、匿名での書き込みが保証されているということがあげられるだろう。そもそもインターネットの問題点のひとつとしてこの匿名性ということが言われることは多かったのだが、実際にはインターネットはアクセスログの存在ひとつとっても相当にトレース可能なシステムであったのだ。クッキーなどのアクセス情報収集の方法や、マイクロソフトが画策した認証システムなどの例をみても、電子ネットワーク社会は、ますます「透明性」の度合いを増してきているといってもよい。そのようななかで、あらためて匿名での意見表明の可能性を前面に押し出したのが、この2ちゃんねるであった。ここでは、たとえ不謹慎のそしりをまぬがれない書き込みであっても、その発信元のIPアドレスなどが公開されることはまずないといつてよいのである。

もちろん、ヘイト・スピーチと呼ばれる差別的言辞や個人のプライバシーや名誉を傷つける書き込みも数多くあれば、「荒らし」と呼ばれる掲示板破壊行為もしばしばみうけられる。差別や個人情報に関わる書き込みには、「削除人」というボランティアが対応しているが、これも完璧に機能しているわけではない。こうした現状を情報倫理学の立場から考察する際の基本は「表現の自由とその限界」ということになるのだが、2ちゃんねるという社会現象は、そうした既存の枠組みを越えた考察を必要としているようにも思われる。

まず、「管理者」である「ひろゆき」氏に、まったくといっていいほど「管理」という発想が抜けているということがある。これだけの規模のシステムを運営している人間としては驚くべきことではないだろうか。氏はインタビュー（井上トシユキ『2ちゃんねる宣言』、文藝春秋）において動機を尋ねられて「暇だったから」と答えている。また、しばしば来る内容証明での削除要求の手紙もあまり読んでいない様子だし、係争中の裁判の数すらはつきり覚えていないふしもある。最重要事項のはずの削除人の任命方法に関しても、誰かが勝手に変更したことをとりたてて気にしているわけでもない。こうした氏の態度を無責任ということもできるかもしれない。しかし電子ネットワークにおける責任、とりわけ管理責任というものが何であり、かつ何であるべきなのかが現在に至るまできちんと議論されていない以上、こうした態度は、ある意味ではそもそも特権的管理者の存在を想定していないインターネットというものの本質にすら関わるものであって、たんに「今ふうの若者らしさ」と切り捨てるわけにはいかないように思われる。

また、この2ちゃんねるにおける書き込みが日々酷くなっていつているわけではないという事実にも着目すべきであろう。当初、このようななんでもありの掲示板を放置しておいたら、ゆくゆくは目も当てられない状態になると警告した人もいたが、実際は、それなりの自生的秩序とでもいえるべきものが発生して

きており、さほどの惨状を呈しているわけでもない。それぞれの板でローカルルールのようなものが自然に決まっていたケースもかなりあるし、「荒らし」や「煽り」があっても過敏に反応したりせず、無視して粛々と議論を進行させている掲示板はいくつもある。どうでもいい「落書き」を書き込みたい者にはそれなりの場所が用意されている。ひろゆき氏自身が指摘するように、人間の攻撃性はそれほど長続きするわけでもないのかもしれない。こうした自生的秩序の発生も、かつてはインターネットの中心であったニュース・グループのケースと類似しており、ネットワーク社会における秩序形成特有の現象であるともいえよう。

しかし、そうはいつでも「暇だったから」やっつけて「誰か他にいい人がいれば任せる」という発想で運営されているシステムが持続性という点において不安定な面があるのも事実であろう。実際、警察をはじめとする行政は、ログの作成と保存を強制するなど規制を強化する方向で動いているし、また、回線やサーバの使用料をめぐる生じた閉鎖騒動の後では、これを営利事業化しようとする人物が運営に積極的に参加しはじめている。これをみても、2ちゃんねるがインターネットそのものの縮図でもあることがわかるだろう。インターネットというものの特異性から生まれたこのたぐいまれなシステムが、電子ネットワーク社会にほんの一時咲いたあだ花で終わるのかどうかを見まもりたい。(2002年4月)